

氏名	ライラ・フランセス・カセム
ヨミガナ	ライラ・フランセス・カセム
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第498号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 グラフィックデザインの視覚伝達スキルが切り開く、社会的弱者の創造活動を社会事業化するインクルーシブデザインの新しい地平 〈作品〉 E n t e n t e （アンタント） —信頼からなるインクルーシブなデザイン

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	松下 計
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	藤崎 圭一郎
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	押元 一敏

（論文内容の要旨）

現在、世界の政治、経済において最も重要視されている課題の一つに、持続可能性（sustainability）と社会的包摂（social inclusion）がある。多くのデザイナーはどのようにして社会善（social good）のために、デザインを有効活用できるかと自問自答を始めている。

グラフィックデザイナーとして、グラフィックデザインの視覚伝達スキルを用いて、最も社会から疎外されてきた障がい者と障がい者福祉施設のために、どれだけ貢献できるかという視点から考察した。何故ならば、特に日本は急速に高齢化が進み、労働人口が減少する中、将来、障がい者福祉施設への公的機関からの補助金が減額され、施設の経営状況が圧迫されるのは明らかである。欧米においてはこの「圧迫」が現実となり、近年多くの障がい者を雇う施設が閉鎖されている。施設と利用者の自立のために、グラフィックデザインが、新しい道を提供できると考えた。

グラフィックデザインは、一つの専門分野として、メディアや公共の場にその手法を拓げる多面的なコミュニケーションスキルとして発達してきた。標識（マーク）やピクトグラム（図記号）などの明確な普遍的な視覚言語が私たちの住む環境を作ってきた。

また過去約10年間に、デザイナーとデザイナーではない人々が協働してより社会的に責任のあるデザインを制作する協働制作や、複数の学問領域にわたる協働プロジェクトが増えている。

第2章において、視覚伝達スキルであるグラフィックデザイン、アートディレクション、ブランディングの生まれた背景と、その視覚表現が、社会的な課題に対してどのように活用されてきたかの実例を示した。また参加型デザイン手法の生まれた背景と、その手法の一つであるインクルーシブデザインを使ったチャレンジワークショップを紹介する。インクルーシブデザインとは、プロのデザイナーと商業デザインのプロセスから疎外されているユーザーが、協働してさまざまな商品やサービスを開発する、デザイン手法であり、最先端の人間中心の参加型デザインプロセスである。

第3章では、障がいをもつ人々の定義、障がい者支援、障がい者福祉施設の歴史と現状を紹介する。障がい者福祉施設は、最も社会から置き去りにされてきた場である。現在、ほとんどの日本の障がい者福祉施設は、就労事業や介護事業の提供の目的で設立されている。一方、アート活動を取り入れて、施設の社会的、経済的活用のために役立たせている障がい者福祉施設もある。

第4章では、4つのワークショップを紹介し、それぞれのワークショップの意義を考察した。2008年以来、インクルーシブデザインの専門家は、障がい者福祉施設（Sheltered workshop）で働く人々など、社会から疎外されているコミュニティーに社会的・経済的に活躍できる場を設けるためのワークショップ

モデルを模索してきた。このデザイン主導型であるワークショップモデルでは、グラフィックデザインとインクルーシブデザイン手法を組み合わせることにより、デザイン成果物（商品）が制作されることが重要であると同時に、高品質であることも重要であることを明確にした。

第5章では、著者が4つのワークショップから得られた経験や視点に基づき、発展、考案した8つのメソッドを用いて、1年以上かけて行われたプロジェクトを紹介する。

これまでの検証により、デザイナーがデザインスキルと豊富な経験と知識を活用して、どんなデザイナーもアーティストも、個人もまねをすることができないユニークな独自の創造性を、障がい者福祉施設の利用者から引き出し、作品をつくることができる。それはブランドにもなり得る。利用者が制作する作品やブランドを用いて市場で流通することができれば、障がい者福祉施設の経済的自立にもつなぐことができる。

施設と利用者の自立のため、そして他なる挑戦的な社会環境の中でグラフィックデザインは新しい道を提供できるということを本論文で示したい。

（論文審査結果の要旨）

「新規性」「有益性」「信頼性」の3つの観点から本論文を以下のように評価する。

〔新規性〕インクルーシブデザインとグラフィックデザインの融合。

デザインの創造過程からもデザインの対象としても排除された人々をデザインプロセスに巻き込むインクルーシブデザインと、産業革命以来、コミュニケーション技術を発達させてきたグラフィックデザインのふたつの領域の融合を試み、障がい者による表現をグラフィックデザイナーなりの視点でディレクションを加えて、ビジネスとして成り立つ商品として価値を高め、さらにそれをブランド化する可能性まで示したことに高い新規性がある。

〔有用性〕日本や欧米における障がい者施設における障がい者の就業状況やアート活動のさまざまな様態を調査し、その認識の上に、実際に筆者が東京都足立区にある障がい者施設に通い、現場から得られた知見をもとにした考察には説得力がある。特に障がい者本人だけでなく、障がい者の家族や、障がい者施設のスタッフに対して、グラフィックデザイナーが何を“ともに”行うことができるのかを示した論述は、社会的弱者の創造活動を持続的に支援するために特に有益である。また筆者が示した障がい者の表現をグラフィックデザインの素材にするための8つの方法論を、今後同様な活動を行うものにとって有効な行動指標となると考えられる。

〔信頼性〕本論文は筆者が英語で執筆したものを筆者が依頼した翻訳者し日本語にしたものである。審査会に至るまでの過程のなかで、翻訳者の日本語表現能力に問題があることを指摘した。審査に至るまでの過程で、固有名詞表記の多くの間違いも指摘し、それは提出された論文では訂正されているが、筆者の論文の日本語化への取り組みへの甘さはいささか論文の信頼性を下げる結果となっている。筆者の原文も内容的な重複が多く、論文としてはいささか冗長なものとなっている。また、研究背景の論述において日本の話と欧米（特にイギリス）の話が混交している部分が見受けられる。

しかし、こうしたことを否定的な側面はあるものの、この論文の主体的部分は、筆者の取材と実践から生まれた論考であり、経験に基づいた考察には強い説得力があり、ここで書かれた考察には高い信頼性があることを認める。それは日本語表現のいささかのあやうさをカバーするにはあまりある研究成果である。

以上、3つの観点から、本論文は博士学位に値するものと評価する。

（作品審査結果の要旨）

ライラ・フランセス・カセム（以下ライラ・カセム）は足立区にある障害者施設、社会福祉法人あだちの里「綾瀬ひまわり園」に通い、これまでアートにまったく関係のなかった施設のスタッフ達や複数の知的障害者達と触れ合い、表現する喜びに興味を抱かせ、飽きさせず、失敗を乗り越えられ、何よりも作者に自ら主体的に制作している意識を喚起させ（やらされているのではなく）、さらに、それらによって造られた障害者の作品をデザインに落とし込み商品化させ販売する事を目的とした、これらのすべてのシーンにおける方

法論を、障害者施設の経済的な自立と社会的な権限を得るために用いるという、彼女の研究のテーマのテストとして実施されたプロジェクトのプロセス展として位置づけられた作品である。

作品はドキュメンテーション（テキスト、映像）、障害者制作の原画、デザインされたプロダクトからなる。

例えば障害者の中には描く行為に興味を持つ人と、描かれたものに興味を持つ人に分かれるが、それぞれにうまく制作意欲を抱かせ、描かせ、それを再びいかに商品としていかに成立するか、一目して理解できるように展示として組み立てられており、実施に基づいた手法そのものを見せる作品展示という目的が達成されている点について評価に値するものである。

従って文字主体としたパネル展示もドキュメントを示すものとして極めて重要であり、本作はライラ・カセムが考えるメソッドの構造図として論文と深く関わりながらビジュアライゼーションされたものであり、これらのドキュメントの編集及び展示構造、デザインングについてもよく練られている点についても評価に値するものである。

（総合審査結果の要旨）

社会的弱者など特別な立場にいる人（エクストリームユーザ）をデザインプロセスに積極的に取り入れるインクルーシブデザインの現場においては、通常プロダクトデザインやファニチャーデザインの方法論が多く取り入れられる中、ライラ・フランセス・カセム（以下ライラ・カセム）はグラフィックデザイン、アートディレクション、ブランディングの方法論（視覚伝達の方法論）を取り込んだ点に彼女の研究の新しさが見受けられる。

またこの研究の特徴は、視覚伝達の思考性を切り口としながら、最終的に、継続的に障害者施設の経済的自立と社会的権限を持つ事を施設のスタッフと共有する目的が論文中で明確にされており、実社会に配置される事を視野にいれた広がりを持つ研究になっている。かつライラ・カセム自身が長期に渡り障害者施設に通い、ワークショップをくり返してそこで得た方法論や考え方を論考に盛り込むなど、単なる理論上の展開でない事も評価できる点である。

論文はグラフィックデザインという専門領域が過去に社会的な課題にいかなる解答をしてきたか、また、今後どのような社会的な活動をし得るか、その事に絞ってグラフィックデザインを編集された点においても新しい論考と認められるうえ、障害者や障害者施設の定義と歴史、芸術とどう関係を作ってきたか背景の十分な考察を下地とした上で、4章から実例に入っている点でも土台のしっかりした論考になっている。

展示作品においても、論文と深く関わりながら足立区にある障害者施設「綾瀬ひまわり園」の実例を、テキスト、映像、原画、商品例を上げ、途中経過と培われた手法を分かりやすく明解に展示出来た点も評価できる。